



Title	在日ベトナム人の孤独からみる多文化共生の課題と実践 : 「ベトナム探究によろこそ」講演会の報告
Author(s)	Phan, Thi My Loan; 山下, 正; 比留間, 洋一
Citation	外国語教育のフロンティア. 2026, 9, p. 125-133
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104370
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

在日ベトナム人の孤独からみる多文化共生の課題と実践 —「ベトナム探究によろこそ」講演会の報告—

Challenges and Practices of Multicultural Coexistence through the Lens of Loneliness among Vietnamese Residents in Japan: A Report on the Lecture “Exploring Vietnam”

Phan Thi My Loan, 山下 正, 比留間 洋一

Abstract

Although the concept of “multicultural coexistence” has faced considerable criticism, it seems to have become increasingly important in recent years, particularly in light of the rapid growth of the Vietnamese population. The lecture series “Welcome to Exploring Vietnam” was launched in 2025 to promote understanding of the situations faced by Vietnamese residents in Japan and to foster dialogue linking education, research, and community practice. This paper reports and discusses the first session, titled “Exploring the Loneliness of Vietnamese Residents in Japan: Realities and Perspectives for Support.” The lecture highlighted the complex interplay of linguistic, cultural, and institutional factors underlying loneliness, as well as the significance of community and religious support. A post-event survey revealed a high level of satisfaction and a strong interest in continued learning, suggesting that the series functions as a forum for mutual learning and intercultural dialogue. Moving forward, collaboration among universities, local communities, governmental organizations, and religious institutions will be essential for developing a sustainable platform that integrates education, research, and social practice toward multicultural coexistence.

Key words: Multicultural coexistence; Loneliness; Vietnamese residents in Japan; Community-based education

1. はじめに

「多文化共生」という理念は批判も多い¹が、近年、地域社会、教育機関、行政など多様な領域で一層の重要性を増している。外国にルーツをもつ人々が、単なる滞在者ではなく、地域社会の構成員として暮らし・働き・学ぶ存在となっているからであろう。とりわけ、在日ベトナム人（ベトナム国籍をもつ人々）の増加は顕著である。法務省出入国在留管理庁の報道発表（令和6年〔2024年〕末現在）によると、在留外国人数は3,768,977人にのぼり、そのうちベトナム国籍・地域の在留者は634,361人（前年末比+69,335人、増加率+12.3%）で、中国に次ぐ第2位の規模を占めている（出入国在留管理庁「令和6年末現在における在留外国人数について」2025年3月14日

1 例えば、梶田・丹野・樋口(2005) [ii]、近年では、塩原(2025)『共生の思考法：異なる現実が重なりあるところから』 [iii] など。

発表)¹⁰。この数字は、ベトナム系住民（ベトナムにルーツのある人々）が日本社会において確実に存在感を高めていることを示している。

こうした社会的変化を受け、執筆者らは 2025 年に「ベトナム探究によろこそ」講座を発足させた。その経緯には、日本に暮らすベトナム系の人々が年々増加し、その生活背景・文化的ルーツ・アイデンティティが多様化している現実がある。技能実習生や留学生、日本で働く人々、日本とベトナム双方にルーツを持つ子どもたち、さらには日本で生まれ育ったベトナム系の若い世代など、それぞれが異なる経験と視点をもちながら、日本社会の中で交わり、生活している。このような状況のもとで、私たちに求められているのは、ベトナムという国やその人々の歴史・社会・文化のみならず、日本人／ベトナム人という単純な二分法的理解を超えて、日本のベトナム系住民の多様な生活経験についても目を向け、とりわけ「孤独」や「疎外」といった見えにくい問題を丁寧に見つめることである。

本講座では、講演会・シンポジウム・文化交流イベントなどを通して、ベトナムの歴史・社会・文化、そして多様なベトナム系住民の姿に光を当てる。異文化理解を深め、課題を直視することは、「共に生きる（＝排除しない）」社会を築くための第一歩である。講座の目的は次の二点に要約できる。第一に、在日ベトナム人の増加と多様性を多文化共生の文脈で捉え、日本社会における「共に生きる」ための条件や課題を明らかにすること。第二に、理解と関心を広げることにより、ベトナム系住民が日本社会において尊重され、相互理解に基づくよりよい共生の実践が促進されることを目指すことである。

この講座の発足は、単なる文化紹介や知識の拡充にとどまらず、多文化共生の課題と実践を具体的に考える場として、日本社会とベトナム系住民との間に「対話」と「交流」の機会を創出する試みである。

本稿「在日ベトナム人の孤独を通じた多文化共生の課題と実践―「ベトナム探究によろこそ」講演会の報告―」は、第一執筆者（Phan Thi My Loan）が代表として発足を主導した講座「ベトナム探究によろこそ」の第 1 回を契機に、現代日本社会における在日ベトナム人の置かれた状況を、「多文化共生」の視点から報告・分析するものである。

2. 講演会の概要と内容

(1) 開催の概要

第 1 回「ベトナム探究によろこそ」講座は、2025 年 6 月 10 日、大阪大学箕面キャンパス記念ホールにおいて開催された。本講座は、在日ベトナム人を中心とする外国人住民の現状を理解し、多文化共生を担う教育・研究・地域実践を推進することを目的として企画された。初回のテーマは「在日ベトナム人の孤独を探る―その実態と対応への展望―」であり、第二筆者（山下正）が講演を担当した。

当日は、第二筆者による講演に続いて、在神戸ベトナム寺院・和楽寺の住職ティック・ドゥック・チー氏がオンラインで登壇し、寺院を拠点とした在日ベトナム人支援の実践や、宗教的・文化的なつながりの意義について語った。さらに、フラッシュトークとして、ベトナムにルーツを持ち日本で生活する数名の参加者が、自身の経験をもとに、日本社会における生活上の困難や孤独の実態を率直に語った。これらの発表は、研究者・宗教者・当事者が一堂に会して相互理解と共生の意識を深める対話の場となった。

(2) 在日ベトナム人を取り巻く社会的背景

講演冒頭では、出入国在留管理庁の統計をもとに、在日ベトナム人の急増傾向が示された。2024 年末時点で約 63 万人に達し、技能実習生、特定技能労働者、留学生在がその大半を占めている。技能実習生の約 47%、特定技能労働者の約 50% をベトナム人が占めており、日本の産業構造を支える重要な存在となっていることが報告された^[ii]。

この背景には、ベトナムの若年人口構成、日越経済連携の進展、日本企業の投資拡大などの要因があると説明された。また、日本社会における生活基盤の脆弱さや制度的支援の不十分さが、移住者の社会的孤立を助長していることが指摘された。

(3) 孤独の実態と健康影響

第二筆者は、これまでに実施してきた在日ベトナム人を対象とした疫学調査の結果を紹介した。調査によると、約 28% が「孤独を感じる」と回答しており、日本人全体（約 20%）よりも高い割合であった。孤独は単に他者との関係が希薄な状態ではなく、「社会から取り残されている」「他者との断絶を感じる」といった心理的側面を伴うものであると解説された^[iv]。

孤独は精神的健康に悪影響を及ぼすことが明らかにされており、抑うつや不安症状の発症リスクを高める要因となる。第二筆者らの前向きコホート研究では、孤独感の高い者ほど抑うつ・不安のスコアが有意に高く、希死念慮にも関連する可能性が報告された。また、報道事例として、経済的困窮や社会的孤立から自傷に至った留学生女性のケースが紹介され、孤独がもたらす深刻な精神的影響が具体的に提示された。

(4) 孤独を生み出す社会的要因

孤独を高める要因として、言語の壁、文化的慣習の相違、制度的支援の不足、職場における人間関係の希薄さなどが複合的に関与していると説明された。特に職場での人間関係において、日本人との交流頻度が高いほど文化的ストレスを感じやすいという研究結果が示され、相互理解の不足が孤独感を助長する可能性が指摘された^[v]。

一方で、孤独を和らげる要因として「信頼できる相談相手の存在」が挙げられた。ベトナム人の約 7 割が健康や生活の問題を相談できる相手を持たないことが示され、身近な相談者や地域ネットワークの必要性が強調された。

(5) 孤独への対応策と地域支援の実践

後半では、孤独に対する支援の具体的実践が紹介された。まず、ベトナム語対応のメンタルヘルス支援アプリの開発が進められており、自己モニタリング機能、オンライン相談、必要時の医療機関紹介などを通じて、文化的背景に配慮した支援を実現していることが説明された。

加えて、地域における実践例として、兵庫県のベトナム寺院「和楽寺」での宗教的支援や、民生委員による伴走型支援、ベトナム人同士の相互扶助活動が紹介された。寺院は若い技能実習生の心の拠り所となっており、地域の日本人住民との関係も形成されつつある。また、小野市の民生委員が出産に立ち会うなど、家族のような信頼関

係が築かれている事例も挙げられた。これらは、制度的支援を超えて地域の絆を強化する多文化共生の好例である。

(6) 講演会のまとめ

講演のまとめとして、第二筆者は「ベトナム人特有の孤独には、言語・文化・制度・社会の壁が複合的に作用している」と述べた。孤独は精神的・身体的健康を脅かすリスク要因であり、その対策には心のケアと地域とのつながり支援を両輪とする多層のアプローチが不可欠であると強調した。さらに、ベトナム人自身のリーダーシップと相互扶助の力を活かし、地域と共に支え合う共生型コミュニティの形成が今後の日本社会に求められる方向であると結んだ。

3. 参加者アンケートの結果

(1) 回答者の概要

参加者は対面 42 名、オンライン 75 名の計 117 名であり、そのうち 78 名から回答を得た。講演会終了後に実施したアンケートは Google フォームを用いて回収し、定性的・定量的な両側面から講演会の効果を検証した。回答者は学生、大学教職員、医療専門職、行政職、地域住民など多様な層にわたっており、幅広い視点から意見を収集することができた。

(2) 回答者の属性

回答者の属性として最も多かったのは大学生（39.7%）で、次いで教員（21.8%）、医療専門職（15.4%）が続いた。修士課程大学院生が 11.5%、博士課程大学院生が 2.6% であり、教育・研究の双方に関心をもつ層が一定数含まれていた。行政職や地域住民も少数ながら参加しており、学外からの関心も確認された（図 1）。

年齢層では 20 代が 39.2% と最も多く、60 代以上が 21.5%、50 代が 17.7% であった。30～40 代も一定割合を占め、若年層から高齢層まで多世代の参加がみられた。性別は女性が 67.9%、男性が 30.8% であった。ベトナムに関わる仕事や研究をしているかという設問では、「はい」が 36.7%、「いいえ」が 63.3% であり、直接的な関わりを持たない層にも関心が広がっていることがわかった。

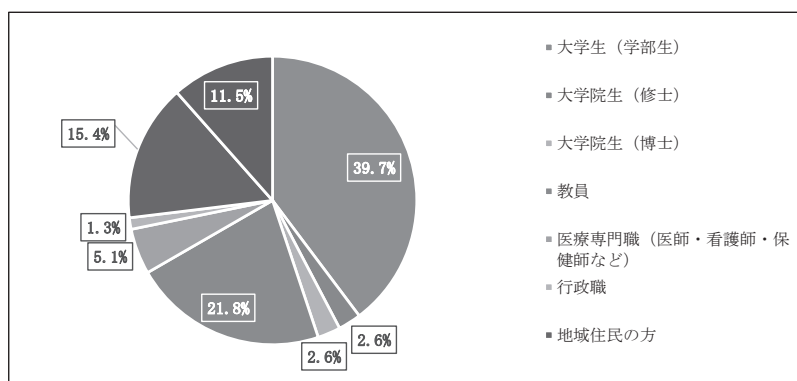


図 1 参加者の属性 (N=78)

(3) 講演の評価

講演全体への満足度は非常に高く、「非常に満足」が41.8%、「満足」が53.2%であり、95%以上が肯定的に評価していた。講演内容のわかりやすさについては、「非常にわかりやすかった」46.8%、「わかりやすかった」53.2%で全員が肯定的に回答している。講演時間については「適切だった」が83.5%で最も多く、「少し短かった」11.4%、「少し長かった」5.1%であった。

講演を通してベトナムに対する理解が「非常に深まった」「深まった」と回答した者は合わせて97.4%にのぼり、学習効果の高さが示された(図2)。また、講演内容が自身の学びや仕事に「非常に役立つ」「役立つ」と回答した者も合わせて98.7%であり、教育的・実務的双方に有用であったことが明らかとなった(図3)。さらに、今後もこのような講演会があれば参加したいと答えた者は98.7%を占め、継続開催への強い期待が示された。

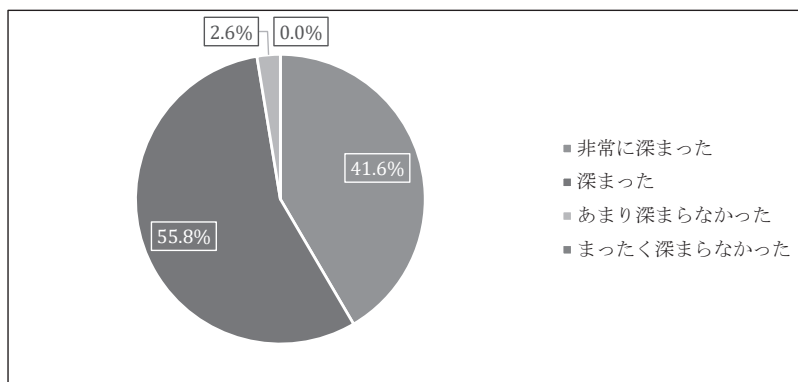


図2 講演参加によるベトナムへの理解の深まり (N=78)

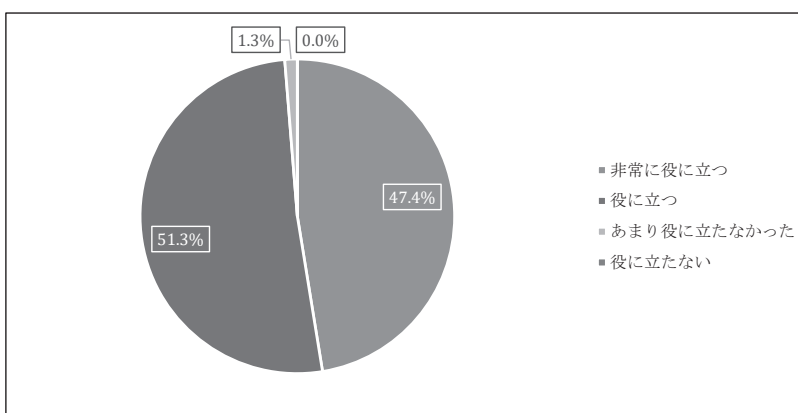


図3 講演内容が自身の学びや仕事に役立った程度 (N=78)

(4) 自由記述にみられた主な意見

1) 理解が深まった点

多くの参加者が在日ベトナム人の孤独や孤立の現状について理解が深まったと回答した。特に、留学生や技能実習生の体験談を直接聞いたことが、理解促進に大きく寄与した。「孤独と孤立の違いが理解できた」「構造的な社会課題としての孤独を考える契機になった」といった記述もみられ、社会構造と個人心理の関係を考察する機会となった。

2) 今後さらに知りたいテーマ

今後の関心として多かったのは、医療アクセスや外国人相談体制、救急医療での外国人対応であった。技能実習制度の課題、ブローカー問題、自殺率、労働・生活環境など社会構造に関わるテーマも多く挙げられた。教育分野では、外国ルーツの子どもの学習支援や学校適応への関心が高く、具体的な成功事例や支援プロセスを知りたいという要望も多かった。

3) その他の意見・感想

自由記述の多くは肯定的であり、「非常に有意義な内容だった」「継続して参加したい」「ベトナム語を学びたくなった」といった声が寄せられた。「自身の研究や教育活動に活かしたい」「支援者としての視点を得た」といった専門的立場からの意見もみられ、講演が実践的学びの機会として機能したことがうかがえた。

(5) 結果のまとめと考察

アンケート結果から、参加者の大多数が講演内容に満足し、理解促進や実践的示唆を得たことが確認された。特に、在日ベトナム人の孤独という社会的課題に対して参加者が主体的に関心をもち、今後も継続的に学びを深めたいとする姿勢が明らかとなった。

一方で、音声環境や資料共有など運営面の課題も浮かび上がった。これらは次回以降の開催における改善点として重要である。また、「より学術的・専門的な内容を深めてほしい」という要望は、本シリーズが学問的探究と実践的支援をつなぐ場として発展していく方向性を示している。

総じて、本講演会は在日ベトナム人の孤独を切り口に、多文化共生社会における「孤立とつながり」を考える契機となった。参加者の高い満足度と継続的関心は、今後の講座シリーズの展開に向けて大きな可能性を示唆している。教育的にも啓発的にも意義が高く、学内外をつなぐ社会的学びのプラットフォームとしての機能が確認された。

4. 考察

(1) 多文化社会における「ベトナム探究によるこそ」の意義

「ベトナム探究によるこそ」講座は、在日ベトナム人の現状理解を出発点としながら、文化や立場の異なる人々が共に学び、意見を交わす機会として実施されている。本講座では、孤独、医療、教育、宗教など、多文化社会に関わる具体的なテーマを取り上げ、参加者自身の経験や関心と結びつけて考えることを重視している。

その特徴は、研究者や学生だけでなく、地域関係者や当事者など多様な立場の人々が関与している点にある。知識の一方向的な伝達ではなく、相互に学び合い、理解を深める「対話的な学び」が生じていると考えられる。多文化共生をめぐる課題は、単なる文化理解にとどまらず、異なる背景をもつ人々が課題を共有し、協働的に対応を模索する過程にあるといえる。「ベトナム探究にようこそ」は、そのような取り組みの一つとして、多文化共生を実践的に学ぶ場の可能性を示している。

(2) 教育・研究・地域実践をつなぐ知の循環

本講座の特徴は、教育・研究・地域実践の三つの領域を連動させている点にある。大学内での学びにとどまらず、講座の企画・運営には地域や宗教団体、国際的ネットワークが関わり、学術的知見と現場の知が相互に影響し合う仕組みが形成されつつある。このような構造は、大学が社会と協働しながら課題解決に取り組む「知の循環」を促進しているといえる。「ベトナム探究にようこそ」は、その一例として、理論と実践を行き来する学びの形を提示しており、地域社会に根ざした教育研究の展開に向けた一つの方向性を示している。

(3) 多文化共生における「ゆるやかなつながり (interaction)」の再構築

講座を通して、参加者の多くが在日ベトナム人の生活や文化への理解を深めたと回答しており、異文化理解の促進に一定の効果がみられた。これは、多文化共生における「ゆるやかなつながり」の再構築が、知識の共有や対話の積み重ねから始まることを示唆している。

ベトナム人が直面する孤独や社会的孤立には、言語や文化の違いだけでなく、制度や労働環境など複数の要因が関与している。これに対応するには、個人への支援に加えて、地域、行政、教育機関、宗教団体などが連携する「多層的な支援構造」の形成が重要である。講座で取り上げられたベトナム寺院・和楽寺や民生委員による支援の事例は、宗教的・文化的資源が地域社会との橋渡しとして機能しうること示している。

また、多文化共生の推進には、移住者側だけでなく、受け入れ側の住民や専門職が文化的感受性を高め、相互理解を深める取り組みが求められる。「ベトナム探究にようこそ」は、そのような両方向の学びを実践的に促す場として一定の役割を果たしている。

(4) 今後の展望：持続可能な共生基盤の構築へ

今後の展開においては、講座を単発の学習機会としてではなく、継続的なインターアクション（ゆるやかなつながり）の契機として位置づけていくことが求められる。アンケートでは、参加者から「継続的に学びたい」「より専門的な内容を知りたい」といった意見が寄せられており、学びを積み重ねる仕組みの整備が課題である。

また、参加者・講師・地域実践者が互いに知見を共有し、次の活動や研究へとつなげていく循環を意識的に築くことが重要である。そのためには、大学・行政・地域組織・宗教団体などが協働し、多様な主体が関わる対話の場を継続的に設けていく必要がある。

このような取り組みを通じて、「ベトナム探究にようこそ」は、教育と社会実践を往

還させながら多文化共生を具体的に推進する、持続的なプラットフォームとして発展していくことが期待される。

5. おわりに

本研究ノートでは、「ベトナム探究によろこそ」講座の第 1 回を通して、在日ベトナム人の孤独感をめぐる現状と課題を整理し、多文化共生の視点からその意義を検討した。講演会とアンケートの結果から明らかになったのは、孤独は個人の心理的問題にとどまらず、言語的・文化的・制度的要因が複雑に絡み合った社会構造的課題であるという点である。また、孤独の解消には、単一の支援策ではなく、地域・教育・宗教・行政など多層的な支援ネットワークの構築が不可欠であることが確認された。

一方で、講座を通じて得られた成果は、孤独の実態を知ることのみならず、「ゆるやかなつながりの再構築」に向けた実践的契機を提示する点にある。宗教施設や地域住民、教育機関が連携することによって、ベトナム系住民の生活を支える新たな共生のかたち生まれつつある。これらの取り組みは、多文化共生を「理念」から「実践」へと転換する具体的な動きとして評価できるだろう。

しかしながら、依然として課題は多い。多文化共生の理念が社会全体に十分に浸透しているとはいいがたく、外国人住民に対する制度的支援や相談体制は地域間格差も大きい。特に、ベトナム人を含む若年層の孤独や精神的ストレスに対して、継続的なケアを担う仕組みが不足している。今後は、教育・研究・実践を連動させ、孤独を生み出す社会的要因を構造的に捉える視点を深めていく必要がある。

「ベトナム探究によろこそ」講座は、こうした課題を共有し、学問と地域、異文化と日本社会をつなぐ「対話の場」としての役割を担っている。今後は、参加者・研究者・地域住民が継続的に出入りするプラットフォームを形成し、孤独のない社会、つまり共に生きる（＝排除しない）社会の実現を目指すことが求められる。多文化共生の実践は、他者を理解しようとする小さな対話の積み重ねから始まる。その意味で、本講座の取り組みは、在日ベトナム人の孤独を超えて、私たち自身の社会のあり方を問い直す試みでもある。

※おもな執筆担当箇所は次のとおりである。Phan Thi My Loan:1, 5; 山下 正:2, 3, 4; 比留間 洋一:研究全体総括。

謝辞

本講演会において貴重なお話をいただいた在神戸ベトナム寺院・和楽寺の住職ティック・ドック・チー氏、ならびにフラッシュトークにご参加くださった皆様に深く感謝申し上げます。また、「ベトナム探究によろこそ」講座の共同研究者の方々、および講座にご参加くださったすべての皆様に心より謝意を表する。

引用文献

- [i] 出入国在留管理庁. 令和 6 年末現在における在留外国人数について https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00052.html

- [ii] 梶田孝道・丹野清人・樋口直人 (2005) 『顔の見えない定住化：日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会
- [iii] 塩原良和 (2025) 『共生の思考法：異なる現実が重なりあるところから』明石書店
- [iv] Yamashita T, Quy PN, Nogami E, Yamada C, Kamiya K, Kato K. Loneliness as a Key Factor in Depressive and Anxiety Symptoms among Vietnamese Migrants in Japan during the COVID-19 Pandemic: A Cross-sectional Study. JMA J. 2025 Apr 28;8(2):444-452.
- [v] Yamashita T, Quy PN, Nogami E, Seto-Suh E, Yamada C, Iwamoto S, Shimazawa K, Kato K. Depression and anxiety symptoms among Vietnamese migrants in Japan during the COVID-19 pandemic. Trop Med Health. 2023 Oct 31;51(1):59. doi: 10.1186/s41182-023-00542-8.